琉球大学学術リポジトリ

『琉球大歌集』と『南苑八景』　―補完と全貌―

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2007-11-11
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 池宮, 正治, Ikemiya, Masaharu
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/2367

『琉球大歌集』と『南苑八景』―補完と全貌―

池宮正治

一　『琉球大歌集』と『大歌集』

小橋川朝昇が編集したといわれる『琉球大歌集』は、受容と研究の歴史の上で重要な『古今琉歌集』や、島袋盛敏の『琉歌大観』に、重大な影響を与えている。しかしながらその『琉球大歌集』の原本あるいはそれに近い写本も現存していない。琉球大学付属図書館の伊波普猷文庫には、田島利三郎筆写の同名の『琉球大歌集』があるが、これはそれの抄録であって全部ではない。その田島筆写本には後人書き入れと思われる「琉球大歌集」の題が表紙に見られ、内扉には「明治卅年正月二十日／随々庵主／語学材料／第拾八」、「小橋川朝昇編／大歌集　抜」と田島本人の手跡が認められ、さらに次の丁に小橋川朝昇の「琉球大歌集」が「稿本ニテ完結セズニ故人トナリシガ如シ／一ノ巻　神歌ノ部ハ唯餘白ヲ存シ　三巻以下目録アルノミ也　而カモ二巻ノ終ニ吾歌ヲ載セテ略々完結ノ意ヲ示セリ」と、田島のコメントがある。これだと「琉球大歌集」は、当初神歌つまりおもろ（恐らく『おもろさうし』）をも収録する壮大な企図があったものの、何らかの理由で頓挫し、その全体像を余白に残して、その意思を示している。また「二巻ノ終ニ吾歌」を収載してあるというのは、朝昇の歌を末尾に収めて一応の完成を表わしたものと、田島が理解したということである。確かにそのとおりであろう。ありようは異なるが、宜湾朝保編の『沖縄集二編』の、末尾にある百十人の歌人名簿は、位の高い王子から順次按司・親方・親雲上・筑登之に至り、最後にまた親雲

上クラスの浦添親雲上朝昌、伊地親雲上柴隆、小橋川親雲上朝祥三人の名がある。ということは表向き宜湾朝保の編集となっているが、実務はこの三人が執り行ったということであろう。しかし朝昇の該箇所の歌は田島の「大歌集」には筆録されてなく、このあたりの事情も判然とはしない。さらに三巻以降も省略したとあるが、これには、三巻に口説と連（つらね）、四巻に組踊、五巻に木遣歌、六巻にクワイニヤ・ヤラシ、七巻に念仏があった。当時の琉球語文学の全体が収録された、極めた意欲的な歌集だったことがわかる。田島の「大歌集」によると「琉球大歌集」の目録は次のようになっていた。

巻之一

神歌　各曲原歌
春　夏
秋　冬
雅頌　逍遙
規戒　悔悟
謝　古跡　名所付
懐古　別
羈旅　哀
書懐　往復
冠首　同詞
分句　旅歌

疱瘡歌　賀
巻之二
恋　雑
狂　仲風
伊呂波歌　南苑八景
長歌　短歌
早作田ハヤシ
巻之三
口説　連
巻之四
組躍
巻之五
木遣歌
巻之六
クワイニヤ　ヤラシ
巻七
念仏

そのうち、先に述べたように、巻三以下は目録のみで詞章を収録してない。巻一の神歌も収録してないので、も

ともとの「琉球大歌集」はそうしたものを除いた範囲ということになる。

「琉球大歌集」を写した「大歌集」はどうなっているかというと、右のうち、各曲原歌（本文では「各節本歌」）、雅頌、古跡名所付、冠首、賀（「賀」の部立てはないが三四一番から三四七番の七首がそれである）、同詞、分句、狂歌、長歌、短歌、早作田ハヤシ、を収めている。つまり逆に言うと、春、夏、秋、冬、逍遙、規戒、悔悟、謝、懐古、別、羈旅、哀、書懐、往復、旅歌、疱瘡歌、恋、雑、仲風、伊呂波歌、南苑八景、は収録されていないということでもある。

二　「琉球大歌集」と「南苑八景」

ところが琉球大学付属図書館の伊波普猷文庫には、この欠落した部分を補うことの出来る琉歌集がある。これが『南苑八景』である。これには、南苑八景、春、夏、秋、冬、雅頌、規戒、悔悟、哀傷、懐古、古跡、逍遙、謝、別離、羈旅、感慨、書懐、応題、分句、冠首、疱瘡歌、旅歌とあって、七二五首が収められている。この琉歌集の書名となった「南苑八景」は、「南苑八景」の冒頭から七二番までに相当するもので、尚育王や摂政の浦添王子朝寮ら七人が、王家の別邸である識名園、つまり南苑での八景を題にして歌を詠み合った歌会の歌集である。題詠の、つまり詠み歌琉歌が少ないだけに、これはこれできわめて貴重なものである。これも「琉球大歌集」に当初から収録されていたもので、かつては末尾に近い、伊呂波歌と長歌の間にあった。これが、どうした理由によったのか、冒頭部分に置かれ、全体の書名ともなったのである。現「南苑八景」には冒頭から通し番号がふられており、筆写のもとになったテキストが、すでにそうした状態にあったことを推測させている。

そこで、「琉球大歌集」と田島本「琉球大歌集」（以下「大歌集」という）、それに「南苑八景」の三者の相関、有無をみるために、次のように表にまとめてみた。

琉球大歌集	大歌集	南苑八景	備考
神歌	×	×	
各曲原歌	○	×	
春	×	○	
夏	×	○	
秋	×	○	
冬	×	○	
◎雅頌	○	○	
逍遙	×	○	
規戒	×	○	
悔悟	×	○	
謝	×	○	
◎古跡名所付	○	○	
懐古	×	○	「名所付」ナシ
別	×	○	
羈旅	×	○	「別離」
哀	×	○	「哀傷」
×	×	○	「感慨」

書懐	×	○	
往復	×	○	
◎冠首	○	○	「応題」
同詞	○	×	
◎分句	○	○	
旅歌	×	○	
疱瘡歌	×	○	
賀	○	×	
×恋	×	×	
×雑	×	×	
狂（歌）	○	×	
×仲風	×	×	
×伊呂波歌	×	×	
南苑八景	×	○	
長歌	○	×	
短歌	○	×	
早作田ハヤシ	○	×	

上段「琉球大歌集」の部立て目録の上に◎とあるのは、「大歌集」と「南苑八景」の方にあることを示し、また両方にないものを×として表示してある。つまり「南苑八景」の琉歌は、まぎれもなく「琉球大歌集」の一部であっ

て、しかもこれまでの「大歌集」の同量以上に歌数を増やし、両者は相補完して「琉球大歌集」の全体像をいよいよ明らかにしている様子が、分かるはずである。

この両者の、「大歌集」が写した写本と「南苑八景」が写した写本が、どの程度の親疎の関係にあるかは、両者にある「雅頌」「古跡」「冠首」を比較すれば、大方の推定が可能ではないか。少なくとも両者のそれぞれの親本は両者を比較することでしか、その様子を伺うことはできない。まず「雅頌」を比較してみよう。

「大歌集」の「雅頌」は一六四番から二四九番までの八六首、「南苑八景」は一七七番から二三二番までの七六首で、「南苑八景」は十首少ない。歌数が少ないだけでなく、歌の配列も対応していない。しかも「南苑八景」雅頌の一八二番「穂花咲ぢれば」の歌、二一七番の「首里天加那志」の歌、二二七番の「勝連の島や」の歌などは、「大歌集」ではそれぞれ各曲原歌に採られた歌で、その九番五七番一〇七番の歌である。また一九三番「十日越の夜雨」の歌、二〇八番「六十かさびれば」の歌、二二六番「東り立つ雲や」の歌、二二八番の「稲やかいひろて」の歌、二三一番の「いつかだらともて」の歌などは、「南苑八景」にしかない。

同様のことは「古跡」にもいえる。「大歌集」では「古跡」は二五〇番から三三〇番までの八一首、「南苑八景」では四二一番から四五三番までの三三首、「南苑八景」では四八首も少ないのである。配列も規則的に対応しているとはいえない。「雅頌」のように「南苑八景」にしかない歌はないが、四三六番「天川の池に」の歌は、各曲原歌の六二番である。それにしても「南苑八景」の「古跡」部の歌は、「大歌集」の四〇％と少ない。そういえば「大歌集」に較べて「南苑八景」は省略の傾向が強く、特に作者の氏名を記さないことが多く、記しても名前を落とすなどのことがみられる。ただしその逆の場合も若干指摘できる。

あるいはまた、誤写もしくは異伝と思われるものもある。例えば、四三〇番の「見れば思出ゆさ」の歌は、「大

歌集」三二五番歌では「拝でおべ出ゆさ」となっているが、「古今琉歌集」でも「をがで」になっていて、これが元の「琉球大歌集」の歌であった可能性が高い。ただし「をがで」は見る、の敬語なので、実質は「見れば」と同じで、どちらかが異伝である可能性も残されている。

「冠首」は、「南苑八景」と「大歌集」は歌数や配列もまったく同じである。ただ冠首のはじめの、「南苑八景」六五七番「はるゝと拝で」歌の作者が「与那原親方」となっているが、「大歌集」では「上江洲親雲上　文」とある。また「南苑八景」の六五九番「聞けばきくごとに」歌の前に「読谷山王子きよらがさの歌と云ふ八文字を冠首にして」とあるが、「大歌集」では、次の歌（「南苑八景」の六六〇番歌、「大歌集」の三三四番歌）に「読谷山王子」とあって、「南苑八景」の方が詳しく正しい。部立てとしての「冠首」については後述するとして、これは「きよらかさのうた」（美ら疱瘡〔かさ〕の歌）を初句の第一字にいただいて詠んだものである。伊波文庫所蔵の「疱瘡歌集」の末尾に、意味のよく分からない「清らかさの歌といふ八文字を冠りにして／朝憲　休晏　元一」とあるのも、これを言っているのではないか、と思われる。とするとこの読谷山王子は、一七七〇年から八五年まで摂政を勤めた読谷山王子朝憲（一七四五～一八一一）ということになる。

「分句」は、一首の歌の上句下句を二人で分けて詠んだので、このようにいうのであろう。和歌には「分句」ということばはない。一首を上下二人で詠むのは「万葉集」にもみられるが、『金葉集』（一一二七年頃成立）に始めてこうした歌を「連歌」といい、十一首収めている。これを研究上では、後世の長い連歌と区別して「単連歌」といっている。つまりここの分句はこの単連歌に相当するもので、つまり「連歌」のことである。「南苑八景」はこれがこの一首しかないが、「大歌集」にはこれに続いて三首ある。

以上のように、両者にある部立てを比較すると、「大歌集」と「南苑八景」両者の直接のテキストは、間違いな

く「琉球大歌集」の系統ではあるものの、相当に距離があると認めないわけにはいかない。しかし、それでも「南苑八景」が「大歌集」を補完して、かつての「琉球大歌集」に近づいていることは確かである。

三　「琉球大歌集」と島袋盛敏『琉歌大観』

一八九五（明治二八）年に出版された琉歌集『古今琉歌集』の凡例には、始めに「本集は故小橋川朝昇大人の編集したる歌集に基き其の他数本を参考して取捨編成したるものなり」とあり、朝昇の「琉球大歌集」を基本に取り込んだ編集であると述べている。しかし編纂自体はまったく和歌集の編纂にならったもので、春・夏・秋・冬・恋・仲風・雑となっており、仲風の部を立てたところが沖縄らしいところである。しかしこれとても歴代の和歌集には雑体といって異なる歌形をまとめることがあるので、やはりどこまでも和歌集にならったものと言える。ところが頭注のかたちで古典三線曲の節名も付けられていて、琉歌集の伝統である節組琉歌集の面影も消えてはいない。収録歌をみると、「琉球大歌集」の歌をそのまま全部収めたのではなく、取捨選択して採録している。

真境名安興が中心になって編纂した「琉歌大観」の稿本の写本が、台湾大学研究図書館から見つかっている。この「参考書目」には「大歌集　小橋川朝昇」二冊と「大歌集　抜」一冊が挙げられている。前者も後者も「大歌集」とあって分かりにくいが、後者の、つまり田島本と思われる「大歌集　抜」が一冊だとすると、二冊の分量がある「大歌集」は、田島「大歌集」に示された、元の「琉球大歌集」でなければならない。「南苑八景」は書目にあげてないが、文中には「南苑八景」からといって尚育王の歌だけ、一番歌、十番歌、十九番歌、三七番歌の四首を挙げている。「古今琉歌集」では、「琉球大歌集」を基にしたというのに、七二首中わずかに一首だけ、尚育王の五

五番歌だけが採られている。これを受けた島袋盛敏「琉歌大観」では、尚育王の一番歌、十九番歌、五五番歌が採られ、作者名を記さず、与那原里之子親雲上の十七番歌一首、合計四首が採られている。これだけから、「古今琉歌集」や島袋盛敏「琉歌大観」が「南苑八景」を見たかどうか、判断できない。というのは国王の歌は伝承歌になりやすいし、与那原の歌が何故作者不明歌なのか、「南苑八景」そのもののテキストを見ていれば、起こりにくい現象のように思われるからである。あるいは切り離されて「南苑八景」だけ一人歩きしていた可能性もあるかもしれない。

見方を変えれば、「琉球大歌集」の影響は個々の歌の採否よりも、部立てや範囲といった、その提案だったのかもしれない。「琉球大歌集」が断念した、巻三所収予定の口説や連（つらね）、巻四の組踊、巻五の木遣歌、巻六のクワイニヤ・ヤラシは、台湾本「琉歌大観」に採られている。島袋盛敏「琉歌大観」では特にその分類（部立て）に対して強い影響を与えている。島袋盛敏「琉歌大観」は、全体二八九一首のうち、前半を「節組の部」（一～一四〇二番）、後半を「吟詠の部」（一四〇三～二八九一番）に分けている。前半はその名の通り、二〇八節の三線曲のもとに琉歌を分類したものである。後半は吟詠つまり詠み歌の意で、その分類に「琉球大歌集」が影を落としているように思われる。

琉歌大観	琉球大歌集	備考
春夏秋冬	春夏秋冬	
賀雅	雅頌・賀	
相聞	恋	
哀傷	哀	「南苑八景」は「哀傷」
名所	古跡名所付	
旅	羈旅・旅歌	
教訓	規戒	
願望	感慨・書懐	「書懐」は「述懐」の宛字か
風刺		
懐古	懐古	
分句	分句	
音楽		
酒		
天然痘	疱瘡歌	
長歌	長歌	
短歌	短歌	
狂歌	狂歌	
雑	雑	
大島民謡		

右の島袋盛敏「琉歌大観」については全部の部立てをあげ、「琉球大歌集」についてはこれに対応するものだけ挙げてある。「琉球大歌集」の逍遙、悔悟、謝、別離、往復（応題）、冠首、同詞などはなく、仲風は節組の部にある。

そのうち「南苑八景」の「分句」には安仁屋政章と朝昇の一首しかないが、「大歌集」には四首ある。その初めの一首「草葉うるわしゆる」の歌は「南苑八景」にもあるが、後の三首は「南苑八景」にはないのである。さらにその三首のうちの二首、「夢に無蔵おそば」（「大歌集」三七三・三七四）と「崇元寺入口に」（「大歌集」三七五・三七六）がそれぞれ「大観」の二六七七、二六七八番の分句にはいっている。他の二首は参考として同箇所に挙げるとともに（番号はない）、「草葉うるわしゆる」の歌は賀頌の部（一六五五）に、「はじめてどやすが」の歌は相聞の部（二〇九八）に出ている。分句は他の琉歌集には出ていないので、島袋盛敏「琉歌大観」は田島の「大歌集」を参考にしているといえる。

「冠首」については、先に若干説明したので省略に従うが、「はる」「なつ」「あき」「ふゆ」を各句の頭においた二首、「はる〳〵と拝で」の歌（「大歌集」三三一、「南苑八景」六五七）と「春や花盛り」の歌（「大歌集」三三二、「南苑八景」六五八）は、島袋「大観」ではそれぞれ相聞の二一一一、雑詠の二八七九に入っている。これに続く「きよらがさのうた」を詠んだ読谷山王子の疱瘡歌は採られていない。したがって島袋「大観」には冠首の部はない。それに他の部にとられた二首は、ともに「古今琉歌集」に採られ、「はる〳〵と拝で」の歌は「大歌集」では作者を「上江洲親雲上　文」とし、古今では「江洲親雲上」とし、「南苑八景」では「与那原親方」、島袋「大観」では「与那原親方良矩」としている。「大歌集」が作者を「上江洲親雲上　文」とし、古今では「江洲親雲上」としたのは、江洲親雲上が文氏だからで、他にも文氏江洲の歌が出ている。島袋「大観」は他のところで

は古今琉歌集を多く採用しているが、ここでは「南苑八景」の作者を採用している。次の「春や花盛り夏かしやあれが秋はてて無蔵が冬らとめば」（「南苑八景」）の歌は、古今、大観ともに「大歌集」の「春やはなざかりなつかしやわらべあきはててからやふゆんさらめ」となっている。どちらに偏して依拠したのか、なかなか見えてこない。

こうした冠首の、はじめに「はる」「なつ」「あき」「ふゆ」を読み込むやり方は、例えば『伊勢物語』にも見られる。『伊勢物語』の東下りで、三河の八橋にさしかかり、かきつばたを見て、これを頭にして読み込んだ、「唐衣きつつなれにし妻しあれば　はるばるきぬる旅をしぞおもふ」（古今和歌集「羇旅歌」四一〇番）とあって、以後多くの歌集に見られるようになる。ところが「琉球大歌集」の編者は「きよらかさのうた」を頭にした疱瘡歌も冠首に加えた。この八首の歌は古今琉歌集にも採られた上で、「大観」では「天然痘の歌」になっている。しかし「琉球大歌集」や「南苑八景」にある「疱瘡歌」は採られていない。『浮縄雅文集』には、石嶺真忍の死を悼んだ文章のなかに、「南無阿弥陀仏」を頭にして、

存命てわする時しもなき跡に　おもひ出てやそでぬらすらん
むざんやなをくれ先立習ひなるを　しらぬかほなるわがなみだかな
あさましやかくあるべしと知るならば　ふかき契を成ざらましを
道しらぬ死出の山路を蹈わけて　こころぼそくもひとりゆくらむ
頼もしく法の灯火明らかに　わたるもやすき遠き彼岸
仏神何祈らん極楽の　道知るべなるふかき誓に

と詠んだものがある。これも「冠首」に相当するもので、琉歌の「冠首」はこうした和歌の応用である。

「同詞」というのは、ある長さの語句を四句にわたって繰り返すもので、例えば「自由ならぬ自由の自由なよてからや　自由ならぬ自由も自由どやゆる」といった、ことば遊びの歌である。この歌を含めて六首が「大歌集」に収録されているが、「南苑八景」にはない。また他の歌集にもなく、「琉球大歌集」にのみ採られていたものである。このうち「寅の方の風に」の歌（「大歌集」三六七番）と「こんながいの御待」の歌（「大歌集」三六八番）の二首は、古今琉歌集にもとられている。そしてこの六首全部が「大観」に採られている。だが、「同詞」の部は立てず、賀頌や相聞、哀傷、狂歌、雑詠などに分散して組み入れている。

これも和歌からヒントをえたのであろう。万葉集には「よき人のよしとよく見てよしと言ひし　吉野よく見よよき人よく見つ」（二七番）とある。ただし和歌には「同詞」という部立てはない。

「長歌」や「短歌」の部立ては、和歌にもみられるが、内容は「琉球大歌集」にしかないユニークなものである。しかしこれが「大歌集」に引継がれて「大観」に入っている。この分類の基準はどちらかというと曖昧で、「長歌」の場合、五句以上あるのはよいとして、四句の結句が八音というだけで、例えば「安里八幡の松抱きゆるおすくおれが露たひはど里とぬかれらぬ」（「大歌集」三八三番）までも「長歌」としている。「大歌集」のこの次の「なり木引よすて」の歌（「大歌集」三八四番）も第四句は八音である。実は結句八音の琉歌は少なからずあるのである。さらには「いちごさんまるや中城たみちがけ　瓦屋奉行しきゆて御扶持すらね」（「大歌集」三八一番）の、　可が六音の歌も入っている。もう一首の「円覚寺御門の鬼仏がなし　我無蔵よこしゆすや　目はゑ口はゑおどちたばうれ」（「大歌集」三八二番）は、他の琉歌集では「目はゑ口はゑ」の一句がなく、これ故に「長歌」にはいったもののようである。だとすれば昔蝶節の「みすとめて起きて庭向かてみれば　綾蝶無蔵が　あの花この花吸ゆる妬さ」（百控三〇番）、「東うち向かて飛びゆる綾蝶　まづよ待て無蔵に　あの物この物　いやり頼ま」

（「大観」一一五一番、仲宗根本、豊川本）も「長歌」である。これが他の多くの歌集では、それぞれ「あの花この花」「あの物この物」が脱落して普通の琉歌になっている。さらに「大歌集」では結句が「いやりわないたのま」と八音になっているのであるが、これは「各節本歌」の「蝶小フシ」の歌詞に採られている。「長歌」の最後は長い越来節の歌詞だが、この種の歌は「大観」には採られていない。

「琉球大歌集」（「大歌集」）の唯一の部立てである「短歌」は、「あしやげくだみしやくちるとも　かなしいこと葉やいつしくつが」（「大歌集」三八七番）一首だけである。上句が八・五音、下句が八・五音で、七・五の上句をもつ仲風形式の歌として扱ってもよい歌である。古今琉歌集の仲風には「義理のせめなはもくちはてて　二人ままなゆる浮世やらな」（八六八番）と、上句が八・五音の歌が採られているからである。

以上概略「琉球大歌集」（「大歌集」「南苑八景」）と「大観」の関係をいくつかの部立てを通して見てきた。「琉球大歌集」の意味の大きさが理解されたと思う。

四　「南苑八景」の書誌および凡例

以下に「南苑八景」を全文翻字して紹介することにする。これに先立ち、「南苑八景」の簡単な書誌情報と翻字にさいしての凡例をかかげる。

書　誌

一　一冊。墨付き八二枚。法量、縦二四・五ｾﾝﾁ×横十六・七ｾﾝﾁ。楮紙。

一　十行の罫紙、一面にだいたい五行。柱に「恩河用箋」とある私用の印刷された原稿用紙。

一　筆写者は、厳密には不明とすべきだが、恩河朝祐（玉山）氏か。恩河氏には『玉山歌集』という私家の琉歌集があったというが（台湾本「琉歌大観」書目）、現存しない。なお恩河氏は、琉球大学付属図書館所蔵の『組踊集』（いわゆる恩河本）の書写・編集者としても知られ、また同館蔵の仲吉本『おもろさうし』の書写にも関わったとされている。

一　筆写年代不明。恩河氏の筆写活動年からいえば、明治三十年代から四十年代にかけてか。

凡　例

一　旧漢字は原則として新漢字に改めた。

一　歌を一字開けて上句下句を分けた。

一　本文にも所々濁点があるが、可能な限り濁点を付した。

一　後人加筆と思われる訂正が右側に小さく付いている例があるが、妥当と思われるものについては、その通りとした。

一　明らかな脱字については、試みに括弧（　　）に入れて示した。

一　誤字・誤写と思われる字は、その下に括弧〔　　〕で示して適当な文字を入れて示した。

一　衍入と思われる文字は、その下に〔ママ〕とした。

一　本文、異伝の句を二行書き三行書きにしてあるが、その通りにした。

南苑八景

春鶯

1 尚育王御製　春のあけ〳〵に山の鶯の　庭の花忍ぶ声のしよらしや

2 浦添王子　君がよろづ代の春にさそわれて　ほける鶯の声のしよらしや

3 同　朝日さす山にほける鶯の　声に初春のよわい含で

4 大宜見親方　いつも春来れば谷の鶯の　梅の匂忍ぶ声のしよらしや

5 松嶋親方　御代のはつ春や深山鶯よ　なゝのかしこきも列て出れ

6 登川親方　花の影なれてあそぶ鶯の　声す匂立る春の御庭

7 真謝里之子親雲上　豊かなる御代のめぐて春来れば　ほける鶯の声のしよらしや

8 与那原里之子親雲上　打笑て咲る花に鶯の　千代の春ちゞる声のしよらしや

9 同　春のはつ花に忍ぶ鶯の　ほけるふし〳〵によわい含で

桃桜

10 庭のもゝさくら花の咲しげさ　池までもうつる色の清らさ

11 浦　春のはつさくら桃といつまでん　共に花咲るちぎりしきやら

12 同　もゝのよろこびの目眉打開き　さくら咲くころや花のにしき

13 大　桃と桜木の花の色けさや　見る程もつめて見ぼしやばかり

14 松　枝をつらねたる桃と桜花　玉水にうつる影のしよらしや

15 登　春のいと桜桃といつまでも　花の枝かわて咲る清さ

16 真　玉水に移る影までも美さ　桃と桜木の花の栄

17 与　玉の御屋敷にもゝと桜木の　花やみよしのゝ春の心

18 同　もゝといつまでも色よあらそへて　咲や桜木の花の美さ

南壇

19　八重瀬みうるしの野山打つゞき　そゝにたなびちゆるむらの霞み

20 浦　霞てもないらぬ四方の山はれて　はる〳〵と見ゆる雲の八重瀬

21 同　はてしないぬさらめ打重〳〵　みどりさし添る四方の山辺

22 大　壇の上に登て四方よ詠みれば　雲の間に見ゆる名にし八重瀬

23 松　春や野も山も霞たなびちゆる　空にあらわれる雲の八重瀬

24 登　だんのうしくだり野原からつゞき　かすむうみ山や画かくばかり

25 真　遙々と見れば野山打続き　はてや白雲のかゝる八重瀬

26 与　詠てもあかぬ野山はる〳〵と　かゝる白雲の七重八重瀬

27 同　野山はる〳〵と詠みれば高く　富士に見まがゆる雲の八重瀬

夏涼

28　夏のまひる（ま）もあつさ忘れやい　扇子手ばなしゆさ風の軒ば

29 浦　恵みある風に夏草もなびち　立寄いをがむ袖のすだしや

30 同　御名のごと夏もあつさ忘やい　すだし風たのむ玉のうてな

31 大　夏の日のあつさ凌らぬものよ　かにもすゞしさめ風の軒端

32 松　夏の日どやすが押風のすだしや　あつさ忘ゆさ玉のうてな

33 登　夏山のこかげ若葉さしそへて　袖のしたすぐる風のすだしや

34 真　玉の御屋敷の千代の松風ど　万代の池にあつさわすて

35 与　凌(スヅ)しさや夏のあつさ忘れよさ　千代の松風のやどるうてな

36 同　千とし松風のすゞしさに夏の　あつさ忘れよさ玉のうてな

秋月

37　空も清わたる秋の夜の御月　池に照りうつて光りましゆさ

38 浦　さやかてり渡す秋の月影に　露までもみがく玉の御庭

39 同　かわて照り清さ秋のよの月の　池水にうつる影もすめて

40 大　空澄て秋やてる月も清らさ　千代のかげうつす池のかゞみ

41 松　秋風の吹ばそらもすみ渡て　玉水にてゆる月の清らさ

42 登　そらにすむ月も君が万世の　秋やよくまさてかげの清らさ

43 真　月に磨かれる露の玉ひるて　糸にのち遊ば秋の今宵

44 与　池の玉水に千代のかげうつち　すみわたる秋の月の清らさ

45 同　君が万代のかげや玉水に　うつちすみ渡る秋の御月

園菊

46　春よあざむきやい秋に咲菊の　花のいろ〳〵の霜にほくて

47 浦　御座敷に近く打笑て花の　うれしごとばかりきくのすがた
48 同　嬉しさや君がことぶきよのべる　きくにいく千世の祝ひ契て
49 大　秋ごとに見れば嬉しごと菊の　花におく露や君が恵み
50 松　嬉しごときくの花の色々に　君が幾千代の齢い含で
51 登　嬉しごときくの花の枝ごとに　千代の秋こめてさちやる清らさ
52 真　恵みある露に笑て咲く菊の　御掛けぼさへ美世の匂の立さ
53 与　君が代はいつも嬉しごとばかり　きくの眉ひらき咲る清らさ
54 同　御世の長月にちぎて咲菊の　花の御籬きに匂まさて

農歌

55　きけばうれしさや原の人々の　よがふいざなゆる晩の歌声
56 浦　はる〳〵にひゞくうたのおもしろさ　民のよろこびよ君に告て
57 同　聞けば嬉しさやゆたかなる御世に　遊びたのしみよるはるのうた声
58 大　はる人の戻るうたの面白さ　よがふ願しきよる肝の含で
59 松　豊なる御代や聞けば面白さ　世果報喜びよる原の歌声
60 登　世果報しにゆぐとてはる〳〵のちまた　歌うたて遊ぶ御世の嬉しや
61 真　聞けばほたかちやの昔くりもどち　世かふしにゆぐよるはるの歌声
62 与　聞くも面白さひゞにはる人の　世果報いぐましゆる四方の歌声
63 同　豊なる御代や原の人々も　朝夕喜びの歌声ばかり

松波

64 寝ざめおどろきに波の音とめば　そらに吹くあらし松のひゞき

65 浦　波の音ともて聞けば我が君の　千とし松の葉の風のひゞき

66 同　冬の小あらしの松の葉に吹ば　山にさゞ波の音声立ゆさ

67 大　松に音信る夜嵐にでやんす　我肝さゞ波の音の淋し（や）

68 松　波の音ともて立出て見れば　松に打そよぐ山のひゞき

69 登　池にすだ〳〵と打よする波の　こゝろよわましよる松の葉音

70 真　かすか遙々と波の音とめば　千年まつ山の松の葉音

71 与　識名うやしきのしげる松のはに　しづかなる波の音（の）立さ

72 同　冬の空やすが玉の御屋敷の　千年松波の音のしづか

春

73 北谷王子　常盤なる松のかわることないさめ　いつも春くれば色どまさる

74　めぐて春くれば常盤なる松も　翠さしそへて色どまさる

75 越来按司　深山鶯や節やしらねども　梅の匂しきど春やしゆら

76　初春になれば深山鶯の　咲梅に来鳴声のしゆらしや

77　笠に音ないらぬふゆる春雨や　野山立かくす霞ともて

78　春の山川や花の水鏡　色深くうつる影の美さ

79 春の曝〔曙〕に庭のさんばしり　押開く花の匂のしよらしや

80 春や野も山も百合の花盛り　行そゆる袖の匂のしよらしや

81 春くれば野山さかいあらわれて　百年まで咲る花の美さ

本部按司

82 霞みたつ山の　風にさそわれて咲く梅の花の
　梅の花ざかり　風にさそわれて　匂のしゆらしや

83 春や花盛り深山鶯の　匂忍でほける声のしゆらしや

84 鶯と梅やあかん縁さらめ　のちよて春くればまたんそゆさ

85 うめと鶯やのきど又そよる　んざうとわがなかやいつもそよさ

86 御代の春風にさそわれて出る　深山鶯の声のしゆらしや

87 春や花ごとに深山鶯の　匂惜みかねて鳴るしゆらしや

88 飛切〔散〕る梅に忍ぶ鶯の　匂惜みかねて鳴るしゆらしや

89 田舎礒（　）も節やたがわずに　春の鶯のほけるしゆらしや

90 深山咲梅や誰が知が与所の　忍ぶ鶯のなかん間や

91 鶯の外に知人やないさめ　奥山に咲る梅の色香

92 梅の匂忍ぶ春の鶯や　たるにとひ（　）やが花のいきやの

93 匂におかされて花の本忍で　春の鶯の初声聞やさ

94 春や花盛り匂ひ立増て　笠に匂うつち思ひとめら

95 初春に出てぼさつ花見れば　花も咲清さないやしげさ

96 越来按司　飛立る蝶まづよまて列ら　我身や花の本しらんあもの

97 尚灝王　年や立かわて初春の空に　にわかつき出たる松の翠

98 春毎につめて年やかさねとも　いつも我が心花どやゆる

99 中垣のあけま吹こめよる風に　哀咲梅の匂のしゆらしや

100 春の夜はねやの内までも梅の　手枕にうつる匂のしゆらしや

101 ねてさめて一期春の鶯の　詠よさ梅の花のかげに

102 嬉しさやめぐて初春になれば　翠さしそへる松の美さ

103 千里まで匂吹越る花の　本木たづねやい詠めぼしやの

104 初春になれば心うかされて　花の本忍で出て行ゆん

105 忍ぶ鶯のほける声や聞ね　なまで咲出らん春の梅や

106 神村　庭の梅が枝に深山鶯の　浦々と鳴ゆる声のしよらしや

夏

107 春過て夏に立かへて咲る　槿の紅の花の都

108 春の花染の袖や振替て　涼々ときゝやる夏の衣

109 蟬の羽衣に花の匂うつき　行春の名残り伽にしやびら

110 夏の日の暑さあまりすぎらゝん　流水たよてすだみぼしやの

111 夏や山川の流水たよて　押列て互にすだみぼしやの

112 若夏がなれば心おかされて　玉水にかしらあらて戻ら
玉水に下てかしらあらわ

113 若夏がなれば心浮されて　でかやうまはだ苧よ引ひ遊ば

114 夏の池水に露うけて咲ゆる　菖蒲かきつばた見ればすだしや

115 夏雨の過て露の玉結ぶ　庭のなでしこの花の美さ

116 浦添王子朝熹　花の袖かへちにやひも打招け　すゞし風呼る野辺のすゝき

117 東氏安仁屋里之子親雲上政章　流水たよて木の蔭にあすで　夏の日の暑すだむ嬉しや

118 同　ましらさきなだる野辺の花すゝき　風にさそわれてなびき美さ

119 手になれし扇子の風のないもあれば　いちやし暮すよが夏の暑

120 打招く扇子の風にさそわれて　閨にいる月の影のすだしや

121 柳初翠川に垂かゝて　水に影移す月の恋し（や）

122 笠に音立てゝふたる夏雨も　なまや打晴ててだのてよさ

123 涼しさや夏の暑忘れよさ　玉の風鈴の音声聞ば

124 花の匂とまる花染の御袖　あさゝ羽御衣に（　　）

125 喜屋武按司　庭の青柳ふ〔の〕糸に白露の　玉のゝきつれて見よる清さ

126 秋

春にあやまれる紅葉の錦　鴈の声聞ど秋やしゆる

127 紅葉ちり飛る秋の山川に　柵みよ立て詠めぼしやの

128 神山親雲上　急ぐ路よどで見るほども美さ　沖〔内〕兼久山の枦の紅葉

129 秋ごとに見れば庭の苞〔芭〕内に　嬉しごと（つゆうけて）菊の咲ちやる美さ

130 秋の百草の紅葉しよる中に　打笑て菊の咲やる美さ

131 秋の紅葉ばの色よりもまさて　嬉しごと菊の花の美さ

132 秋のかなしさも忘れよさ宿の　嬉しごと菊の花の匂ゑ

133 秋や色々の菊の花ざかり　錦打交り咲やる美さ

134 朝日さすかげに秋の白露の　玉のみがゝれて見ゆる清らさ

135 秋の節くれば庭の草の葉に　ふりかゝる露の玉の清らさ

136 恋し初秋の月にみがゝれて　草の葉にうちゆる露のしゆらしや

137 照る月の影に色やます鏡　みがゝれて咲やる菊の美さ

138 さやか照る月に庭の白菊の　みがゝれて花の見ゆる美さ

139 嬉しごと菊の花に宿かゆる　露の玉みがく月の清らさ

140 具志川王子　庭の糸柳風にさそわれて　露の玉みがく十五夜御月

141 柳葉にうちゆる露の玉のごとに　光れ影うつす十五夜お月

142 誰よ見れともて白菊の花や　露の玉かめて笑て咲が

143 夏氏安慶田里之子親雲上　春の草花ももどかしやに思て　笑て咲菊もすれて行さ

144 あかいさんはしりつきあけて見れば　庭の白菊の咲やる美さ

145 豊里　菊よやしなやひ百世までんちやる　人の俤の花に残て
146 秋やこんとめば鹿の啼たすが　風に白菊の匂ゑもたき
147 晴るかと見ればやがて打曇て　時雨そめまさる山の紅葉
148 秋風と列て吹廻し〳〵　軒に咲蘭の匂のしゆらしや
149 庭の松風に袖やさそわれて　涼々〳〵［ママ］とをがむ十五夜御月
150 見れば秋風の雲や吹はらて　四方に照り満る十五夜御月
151 昔見初たる人やたがやゆら　月に尋ねぼしや秋の今宵
152 空晴て今宵有明の月も　すめて照りまさる影の清さ
153 喜屋武按司　治とる御代や空晴て月も　さやか照り渡す秋の十五夜
154 有明の空や雲霧も晴て　すめて照る月の影の清さ
155 名に立るごとに空もすみわたて　いつよいも月の影の清さ
156 宜野湾按司　詠めてもあかぬ秋の山寺に　さやかてり渡る月の御影
157 待かねる今宵くもちりも晴て　誠名に立る　秋の十五夜　御月
158 此秋や君が嬉しごと菊の　いつよりも増て咲やる美さ
159 菊見しき戻る我が宿の土産に　あたら花やても一枝をらな
160 尚育王　名に立る今宵くもりないもあれば　水も玉鏡かげの清さ
161 だんぎよ豊まれる秋の夜の御月　針に糸貫さしよらし無蔵が

162 虎瀬山出る秋の夜の御月　くもりなき御代の鏡さらめ
163 八月の十五夜は〔そ〕なれやひ見れば　天久白浜の月の清さ
164 秋風の立ばのがそさうにみしやうる　暑さすだましゆる玉の団羽
165 節や立かわて秋になてをすが　朝夕はなさらぬ玉の団羽
166 喜屋武按司　糸柳枝にのかれゆる露の　玉めがく月の影の清さ

冬

167 天の御定りやいつわりやならぬ　時雨雲わたる冬の初
168 白露の玉ど今日や初霜の　草に置かわて冬やきゝやる
169 喜屋武按司　冬にのが空や花のちりうてる　もしか雲の内春やあらね
170 秋くれて冬にうつり行菊の　紫の色や花の名残り
171 糸にのかれよて貫とめて見ぼしや　さら〳〵とふゆる玉のあられ
172 嵩原里之子　真北吹風のつめらねばいちやし　冬と知れよが今夜の月や
173 庭にさら〳〵とたが足よとめば　菜の葉うつあられ人やをらぬ
174 春の初花も秋の夜の月も　わすて詠ゆる雪の清さ
175 とめてとめらゝぬ老のしがらみに　明日や春の浦こじゆんと思（ば）
176 庭の高こばに音立てふゆる　霰よねこぼす年やよがふ

雅頌

177 英祖王御代　英祖のいくさもい夏過て冬や　御酒もてよらて遊びめしやうち
178 察度王御代　豊む謝名もいが謝名上原のぼて　けやげたる露の玉の美さ
179 尚巴志王御代　月しろの守り勢高の真物の〔衍入〕　御かげ照りわたて国や守る
180 尚円王御代　西の松金がいきちやみすめしやうち　御ぢやんなしぶりや拝ぶしやの
181 尚真王御代　おぎやかもい御代やあめちあいちなとて　時たがん雨のふればよがふ
182 赤犬子　穂花咲ぢればちりひぢもつかぬ　しらちやねやなびちあぶしまくら
183 いしなごの石の大瀬なるまでも　うかけぼせいめしやれ　我御主加那志拝ですでら
184 天久親雲上　首里天加那志　もゝとわれちうわれ　御万人のまぎり拝ですでら
十百十のうがふ
185 豊なる御代のしるしあらわれて　雨露の恵み時もたがん
186 上下の綾門関の戸もさゝぬ　治とる御代のしるしさらめ
187 波風の音も静なるなまの　御代に生たる民の嬉しや
188 あまみこの御神天下りめしや(う)ち　つくる島国や世々に栄る
189 歌と三味線や〔の〕昔始いや　犬子ねあがいの神のみさく
190 毛氏野里親雲上安里〔重〕
おぎやかもい御代にかれい（な）をてさらめ　二月御船うけていきやいきゝやい
191 向氏津嘉山親方朝徳　世界や物音も鳴鳥の声も　晴て有明の月のきよらさ

192 十日越の夜雨草葉おろわしよす　御かけぼさい御代のしるしさらめ
193 十日越の夜雨ときたがんあれば　誠弥勒世の近くなとさ
194 あまん代の昔くり戻きさらめ　十日越の夜雨時もたがん
195 弥勒代や目の前引よすてをすが　ふたかちやの布やうため童
196 豊なる御代や今年なてをれば　ふたかちやの布どねほくなたる
197 弥勒代の昔くり戻ちをもの　打寄て遊ば花の童
198 弥勒代の昔くり戻ち今にさらめ　御万人の間切遊ぶ嬉しや
199 道々の巷歌うたて遊ぶ　弥勒代の頓て近くなたらさ

200 与那原親方　首里加那志天の百年の御祝　幾世くり戻す数やしらん
201 春風や君が御心にたとて　なびく若草や民のすがた
202 春に吹風や首里天加那志　なびく若草や民のすがた
203 恵みある御代の春風になびく　青柳の糸や民のすがた
204 豊なる御代や民草もなびく　庭の糸柳風になびく
205 御慈悲ある故ど御万人のまぎり　上下もそろて仰ぎをがむ
206 照る日のごとに仰ぐ我が君や　盛り行御代の限りないさめ
207 長浜の真砂よみやつくすとも　いきんつくさら〔り〕め君が恵み
208 六十かさびれば百二十の御年　御掛ぼさいめしやうれ我御主加那志
209 二葉ある松の老木なる迄も　御掛ぼさいめしやうれ拝ですでら

210 首里天加那志松のしんたてゝ　した草になやい朝夕をがま
211 御掛ぼさい御代のしるしあらわれて　野山咲花も匂のしゆらしや
212 御万人よそろてかみ願よしやびら　恵みある御代の（百の）嬉しや
213 御主加那志御慈悲嶋国の間切　いき渡てのこる方やないらん
214 道ひろさ御代に生たるしるし　こ〔う〕たの玉ひるて寄合て遊ば
215 打かさねく〳〵かさねよる御祝　御代の御栄のしるしさらめ
216 遊びぼしやあてもまどに遊ばれめ　首里天加那志御祝やぐと
217 首里天加那志をがでのかれらん　遊でのかれらん御茶屋御殿
218 恵みある露に千代の色深く　染る若松のなだる美さ
219 宜野湾按司　月の照るごとに浮世あき〳〵と　打仰ぐ民や百の嬉しや
220 同　治とる御代のしるしあらわれて　深山すむ鳥も人になれて
221 虎瀬山出る秋の夜の御月　くもりなき御代の鏡さらめ
222 唐土天加那志浮名おかなしやゝ　語らても与所のだにやすらぬ
223 尚育王　新玉の朝に四方の民そろて　唐土天加那志千代の御願
224 もゝと年寄の打笑ていまいぬ　うれど世盛のしるしさらめ
225 恵みある御代のしるしやら今日や　空に清渡る月も清さ
226 東り立つ雲やよがふしにくよい　やがて弥勒世の近くなよさ
227 勝連の嶋や通ひぼしやあすが　和仁屋間門のうしほのけやひあぐで
228 稲やかいひろて就〔乾〕しかれもしきよて　よかる日よ選でまぎで遊ば

229 夏氏田嶋親方　御主加那志御願七のこな揃て　出立るきもにさびのあるゑ
230 与那原親方　親子おしつれて出立る今日や　首里加那志天の御祝やごと
231 与那原親方　いつかだらともて御待しゆる内に　御船やひとはしら那覇の港
232 同　朝水に面洗て九重に　登て御主加那志美御機をがま

規　戒

233 尚質王御製　十尋屋にをても八尋屋にをても　肝ど肝さらめ按司も下司も
234 近さたるがけて油断どもするな　梅の葉や花の匂やしらぬ
235 名護親方程順則　鳥だんす深山しげる谷いらで　我が身かくさみることのしゆらしや
236 同　月も照り清さ糸かまいれ童　露の玉ひろてぬちやゐ遊ば
237 伊氏惣慶親雲（上）忠光　仲嶋の小堀あみ打が行かば　物よ思詰めれおその住家
238 奥武親雲上母　しよ〳〵な働の世に名のこされめ　しめて親のこしひかぬごとに
239 与那原親方、一本ニハ神村親方室
深山そこもよる月のかげしらぬ　与所目ないんともてしちやらやすが
240 義村王子　心あて磨け胸内の鏡　物の影うつす宝だいもの
241 与那原親方　假令へ物毎にすぐれやいをても　人のみどころや誠ひとつ
242 与那原親方、一本ニハ登川親方
慎の一字身に守てをれば　ものごとにわたて軽我やないさめ

243 尚敬王御製　我が身つで見きど与所の上やしゆる　無理するな浮世情ばかい
244 尚穆王御製　世界に生らば物よ思つめれ　無理するな人や情ばかり
245 この世人間や皆弟ぢやともれ　浮名御間切や一家内だいもの
246 東風平親方　隠さてやいすれば天と地や鏡　はづかしや影のうつるとめば
247 いきやしかくされが恥かしや浮世　てる月の光影ど移る
248 きものもてなしや蓮の葉の丸［如］く　かどのあてかどのないらぬごとに
249 肝のもてなしや竹のごとすごく　義理のふし〳〵や中にこと［ママ］めて
250 浮世なだやすく渡いぼしやあらば　誠より外の道やふむな
251 いきたらぬことや一人〳〵［ママ］たのみ〳〵　互に補とて年やよゝる
252 いきやしがな肝に月の影うつち　歩む道ひろく照らしぶしやの
253 胸内のかゞみくもりないんごとに　みかきなき月の光うつす
254 たとへ雲霧のへだてゝも月の　おそへかくされめ本の光
255 ふしやあて直くかどもたんごとに　肝のもてなしや竹の姿
256 我ん思るごとに墨に思はまて　人まさいめしやうれ朝夕をがま
257 萬づ物ならいや楽ど限れ　苦しやある間や油断するな
258 瑞慶覧親雲上　梅だいんす雪につめられてからや　花も匂ましゆる浮世だいもの
259 勝れたる松や霜にあらわれる　事にあらわれる人の心
260 高さみと潮どふかさ又ひゆる　ものよ思つめれ世界の習や

261 楽しきよる童あわれしよす見きやめ　あわれしよる者ど匂や増る
262 あたら身や持ゑつらさ思なすな　苦や楽のもとへ代もの
263 流れよる水の泡見ちやめ童　目打しよる間の浮世　さらめ　やすが
264 宜野湾按司　与所べらいもすれば肝どかなしもの　只誠つくち浮世わたれ
265 同　義理もふみたがん仕情も尽ち　浮世渡ゆすど人のかなめ
266 同　浮世ものごとに情あるならい　人になて人の哀れしらね
267 安仁屋里之子親雲上　蜘の糸かすにかゝるなよ蝶る　忍ぶましうちの花に迷て
268 安仁屋里之子親雲上　法のともしびのてる方に向て　蓮花の臺さだていもうれ
269 夏氏安慶田里之子親雲上　草葉なめわかき世界のためしちやる　神の代の昔まなでいもうれ
270 同　あたら月がなし雲の御衣はずて　すだ〳〵とまはだをがみぼしやの
271 栢堂和尚　袖や紺染に染なさぬあても　心定めたる人　とむ〔仏〕　やい〔ママ〕
272 つく〳〵と浮世たづねやいんでは　恃しや誠ひとつさらめ
273 与所の上や誰も秋の夜のさやか　我身のよしあしやよやみさらめ
274 いかな百隠しかくちしよることも　与所しれる習や浮世ともれ
275 瑠璃の玉ごとにめがゝれめ肝の　浮世馴染の朽ぬ間や
276 徳元里之子　誠ある人の跡やいつまでも　盛り行く例し数や知らぬ
277 高宮城里之子親雲上　歩むこと深く思つめてをれば　手放さん玉のきづのつきゆみ

278 本部里之子　我が身さめともて与所の疵思ばのよそ思ばいちやしそしりれが人の肝の
279 いやなれば知らねいきど思知よめ　我肝しち我肝思てんでゆ
280 五男安良城里之子親雲上　さかて入るものや又さかて出る　神の代の言葉なまどしゆら
281 浦添王子　日々のいとなみもくつさてよ思な　我身より外の哀しらば
282 節かわる浮世しらな鶯の　時の間の花ど一期ともて
283 尚育王　慎の一字取守てをれば　のよでそこなよが上も下も
284 同　慎のあれば物毎によたしや　朝夕思つめれ人の心
285 さたするな人のよしあしのことや　いきてやり我身に益のあるい
286 竹のごと心ふしこめて直く　たちあをぐ空にさびやないさめ
287 天と地にたとる二所の親と　是非よあらそよる道のあるゐ
288 縁に引されて恋に傾な　あとになち見れば夢どやゆる
289 野村里之子親雲上　時さらめ世話のかゝる難面も　浮世ならわしと忍でくらす
290 雪につめられて梅や匂ましゆゐ（つらさおみわすて節よ待たね）
291 瑞慶覧親雲上　庭に咲く梅やあん美さ咲ゆる　出てんで童べもてやんとな
292 つゝしみのあてど人の身やもきゆる　わけて思詰めれ旅のみやだ
293 祝嶺　身持かなしくやしよるつもりやすが　いきも又いふもの忘て呉な
294 胸内のかゞみゝがきある間は　肝の出入の思仕事
295 年寄やいづれ親のごとあがみ　童かなしくやなし子ごとに

296 日々に年波やよて行としよすが　浅猿や心いつもわらべ
297 はり川の水やはりやよどむとも　首里加那志美公事よどみなよめ
298 惣慶親雲(上)　向て行先や暗さあらだもの　踏迷なわらべ死出の山路
299 金城親雲上　あけやう行先や暗さあら代もの　ふみ迷なわらべ死出が山路
300 雲や月かくす風や花ちらす　思がごとならぬ世界のならいや
301 儘ならぬものや恋路さめ人の　義理やそむからぬ浮世やれば
302 年やはり川の流れ水ごゝろ　二度ともどさらぬもとのすがた
303 読谷山王子　鳥もうらめるな鐘もうらみるな　暁の別り恋路ともれ
304 鳥よ恨ても鐘ようらめても　明る夜の空の人よ待め
305 田里　花のうつり香に引されて入る　恋の山路やしぼしともな
306 瑞慶覧親雲上　影のうつらぬで心みだらすな　月日この世界の鏡やれば
307 瑞慶覧親雲上　肝やぢやんなしくあれやう思童　あたら花盛り浮世をとて
308 同　人や梅心くつさしきあとの　浮世ふる袖に匂ひたちゆさ

悔悟

309 蔡氏玻名城親雲上　童しよて乗たる竹馬はなまに　ごしやんつく年のよたるらみしや
310 摩文仁王子朝信　きのう見ちやるかゞみなまとやゐ見れば　知らぬ年寄のまからまうちやが
311 美里王子　なまになて肝の肝ど恨ゆる　よしまらぬ月日遊びすぎて

312 きのう今日とめばいな昔なるゐ　馬のはゑしよる年の恨しや
313 今年てやいいゆすもにやまた過はてゝ　ただ一夜ばかり残るらみしや
314 とめてとめらゝぬ老がしがらみに　明日や春の浦こじゆんと思ば
315 阿嘉山筑登之親雲上　若さ大道や夢内にすぎて　覚めてあかつきや上の泊

哀傷

316 喜安親方　浮名秋山を紅に染て　大和吉村の御茶の遊び
317 伊氏惣慶親雲上忠光　上ん殿内たん前はんし前としきゆて　遊ぶたる顔の忘れぐれしや
318 平敷屋親雲上　乱れ髪さばく世の中のさばき　引がそこなたらあかものかん
319 同　摺る墨に涙の玉つれて入ば　書ながす文もちりて見らん
320 毛氏銘苅子　廿一日の夢やいな昔なるゐ　さめて極楽のきどにのよさ
321 玉城親方　よゝる年波の跡先よみれば　今ど百歳の渡中わたる
322 よしや　なよるものきかぬならぬもの聞ゆす　此世から彼世近くなたら
323 安慶田　さす花に向てたるゆへに鳴ゆが　生てこの世界に見ぼしやあてど
324 富川親方　照り清さあても咲き美さあても　誰と詠よが月も花も
325 喜屋武親方浦添王子お弔之時
326 浅増や浮世誰と語らよが　頼む人や昔夢にな（ちゆて）
宜野湾王子　儘ならぬ世界に俤や残ち　行衛ないん人ど百恨よる

327 沢岻親方　肝きやがる人や又もあるさらめ　馴し俤の忘れぐりしや
328 くつさてや鳴んすてゝ先なたる　人の俤よ夢にしきど
329 野国按司　月や月ともて与所や詠めよら　我身やくらさらぬ秋のかたみ
330 共に詠めゆたる人のをてからや　のよで照る月に向て鳴きゆが
331 美里王子　詠めよる内に俤や残ち　山の端に入る月の惜さ
332 よしや　頼む惜む　夜や更て音信やもないらぬ　一人山入端の月に向て
333 馬氏伊計親方　玉の緒の命限りあてさらめ　貫もとめらゝん我花ちらち
334 東風平親方　後世〔生〕の長旅の戻られんともて　あてなしの童行きやらやすが
335 住馴し母の懐は出て　たる頼で入が死出が山路
336 あてなしの童死出が旅しめて　山路踏迷て泣らとめば
337 死出の山路に一人鳴入らは　手取て引たばうれ阿弥陀仏
338 あてなしの童路迷て鳴ば　押戻ち賜れ阿弥陀仏
339 此世にやをらん母拝まともて　あけやうあてなしの鳴よ明ち
340 素立たる里やこの世にやをらん　誰る頼て咲ゆが無情の菊や
341 久志子　なつかしや人のこの世別たす　去年の今月の今宵とめば
342 消果てあとに尋来て里が　物思ほれ〳〵と鳴らとめば

343 誰に暇乞や語て先なたが　しばしまて列ら死出が山路
344 哀れ胸内や死出が暇乞と　旅にこと寄ていきやらやすが
345 尚瀬王　世界や閻夜かおぞむ人をらん　やがて開暁鐘もなゆらやすが
346 同　上下やつめて中に蔵立て　奪取浮世治めかねて
347 潮もみちほくて渡り自由ならん　しばしまて千鳥いやいたのま
348 兼本　なしやなし出ちあけやう母親や　おとな我姿見だんいもうさ
349 百の袖しぼてなきよて導ゆす　声どつとなよる死出が山路
350 朝夕さもよらてあかん語らたる　人もいな草のかげにわかて
351 たるともて聞ゆが一言もないらぬ　昔語らたる友どやすが
352 啼がなし啼も聞人やをらぬ　共に啼ものや山のひゞき
353 此こつさしよすん餘多をらやすが　どくこつさあれば一人ともて
354 胸内やなみだ顔つきや笑て　餘多与所びらいんすらなゝよめ
355 小橋川筑登之　聞けばなつかしやいつまでもと思て　楽も苦もしきやらやすが
356 親のおもかをも知らぬあてなしの　死出の山路に啼らとめば
357 よいつめる年に無蔵やさきだてゝ　あさがをの命たらしかねて
358 仲程親雲上　花や節くれば打笑てさきゆい　詠めらぬ行やる人のあわり
359 墓に手をかけて里呼ひ泣きも　うてつきやめ後世〔生〕に返事もすらぬ

懐古

360 昔思しやい詠ればやがて　泪に月影もくもてみらぬ

361 喜屋武親方　詰めて思事や重なてどいきゆる　迚もかき曇れ夜半の御月

362 共に詠たる夜半の俤や　いつも有明の月に残て

363 別れても互に情有明の　月に思かげやてりよまさて

364 詠みれば詰てむかしごと迄も　つめて思ましゆる夜半の御月
思ひ照り増さる夜半の御月

365 昔詠みたる波之上の御月　なまに俤の照よまさて

366 大宜味親方　互に思忘て夢になるむかし　おび出さ夜半の月に向て

367 昔夜や互に一人とまい〳〵　あれが門もわ門も月にたゝち

368 はり川のごとに年波や立ゐ　くり戻ち見ぼしや花のむかし

369 昔くり戻ちなまになき見れば　なつかしやよらて語らいぼしやの

370 語て恋しさや昔ごとさらめ　まこと戻さらぬ年よやれば

371 いき（や）たるゑ弟ぢやよらたるゑあねべ　昔物語りでしき遊ば

372 ヨシヤ　いきのかいぎにかいぎよでど遊ゆたる　いつの間に里やおとなゝたが

373 宜野湾王子　つく〳〵と一人昔たづねれば　なつかしやよらん歳どやすが

374 宜野湾王子　袖ふたる昔夢やちやうん見でば　しばし慰になよらやすが

375 昔ごとやすが肝になま迄でも　忘れがたなさやあれが情け

376 月日かさなれば忘れよらとめば　夢も俤もしげく立さ
377 袖合遊ゆたるどしいきやて今日や　昔おの比のにやおもわれて
378 墓べ尋れば昔ごとやすが　見ればなまゝでもなつみ立さ
379 与那原親方　歳のよられゝば詰て思われて　共に語らたる人の昔し
380 同　菊よ詠みれば昔唐土の　人の俤の花に浮で
381 菊よやしなやい百世迄で見きやる　人の俤の花にのくて
382 大宜味親方　いな昔なるい哀語らたる　馴し言葉の朽ぬ内に
383 明方の空や思出ゆさむかし　あれときぬ〴〵の別りしゆたす
384 月やしりみしやいら有明の昔　共に詠たる無蔵が行衛
385 詠みたる花やはる〳〵に咲い　昔語らたる人やさかんと
386 なつかしや昔住なれし宿の　露どふみわきよる草葉しげさ
387 廻てくる宿の頼む人やをらん　残るあばら屋に月どてよる
388 いつか月の夜にどし二人つれて　忍で行き昔語らいぼしやの
389 歳のよる盛に詰て思出ゆさ　昔語らたる人の情
390 小橋川筑登之　いつやたが童座喜味舟登て　かぎ枕ら共に月見しやすや
391 幾世なる宿か住馴し人の　音信もないらぬ荒よはてゝ
392 宜野湾王子　いつの夜がやたら恋しあかつらの　よするさゞ波の音声聞やす

393 共に詠たすいつの夜がやたら　恋し波の上の月に向て
394 そたる夜やいつが玉金御側　きのふけふとめば昔なるい
395 真謝里之子親雲上　そたる夜の昔し尋やい見れば　さめて暁のゆめのこゝろ
396 恋しあかつらの波に袖ぬらき　通よたる昔わすれぐりしや
397 昔しのぶ夜や波の鐘聞ど　暁の別れ限りしゆたる
398 詠みればつめて思ひ有明の　月にてりまさる無蔵がすがた
399 読谷山王子　袖よ引とめてしば（し）てやりあれが　いきやる（い）言葉の忘れぐりしや
400 去年のこの時分恋したでぐさの　浦に詠たる月どやすが
401 月にやそらへば忘られんともて　詠みればつめて思どまさる
402 誰が宿よともて立寄い見れば　昔し住なちやる花の木影
403 喜屋武按司　互に恨みたる昔し思出しゆさ　山の端にかゝる月よ見れば
404 あれも詠めよら秋の夜の最中　見れば俤の増て立す
405 さやかてる今日やあれも思出よら　共に詠めたる月に向て
406 忘らてやりしゆすがてる月の清さ　影つれて見ゆるあれが姿
407 喜屋武按司　開門鐘の音や聞ばおび出ゆさ　別れ路のつらさしきやる昔
408 玉城里之子親雲上　袖に匂うつき朝夕詠たる　花の俤の忘れぐれしや
409 泪袖しぼて哀れ語らたる　名残有明の月にのこて
410 おび出ゆさ昔別れ路のつらさ　今に暁の鳥声聞ば

411 うでまくら共に詠たる月や　いつの夜がやたら忘れぐれしや
412 思忘てをたる昔ごとやすが　見ればさま〳〵の思ひ増て
413 咲すれる花に匂のあみやすが　詠みたる昔忘れぐれしや
414 枕ならびたる馴し俤や　今になて一おも忘れぐれしや
415 宜野湾按司　思きやけもすらぬ昔詠たる　花よ見き春の名残りたちゆす
416 音信よ聞ばおび出しゆさ昔　朝夕かたらたる人の名残り
417 仲吉親雲上　只しばしともてかりねしやる宿の　花のうつり香や袖にのこての　とまて
418 朝夕忘らぬ仲嶋の浦の　こひぢ積わたす舟のとまひ
419 神村親方室　今日の月そらやいつよりもまさて　詠れば昔にや思われて
420 小橋川筑登之　夜々に照り明すいねん火の基　尋やい見れば昔やすが

古　跡

421 向氏粟国親雲上　見る人やつめていきかわい〳〵　いつも流よる許田の手水
422 馬よ引かへき暫てやい見ぼしや　音に聞名護の許田の手水
423 赤嶺親雲上　昔手に汲すいつの代がやたら　水やなま〻までもすめてをすが
424 深くしきあたら昔恋事の　いつも名やくたぬ許田の手水
425 人しげく渡る仲嶋の小橋　たが掛ておちやが島代とゞめ

426 たとひ仲嶋や音絶てをても　いつし名の朽が恋の小橋
427 本部按司　思ちやけもすらぬ歳のよて渡る　仲嶋の小橋いのちさらめ
428 小橋川筑登之　月日ある間や光ないんうちゆめ　たとひ荒果て野山なても
429 神村親雲上　仲嶋の浦の冬のさびしさや　千鳥鳴声に松のあらし
430 小橋川筑登之　見ればヲガデ思出ゆさむかしもろこしもろこしの世　民と楽だる玉のうてな
431 面影よ残す許田の玉川に　情け手にくだる水のかゞみ
432 俤よ残すむかしこの河に　縁の水くだる無蔵が手ほさ
433 汲よはじめたる誠心〔真〕実の　流てもたへらぬ許田の手水
434 手にくだる人の形見てやり今に　はかなさや清る許田の手水
435 喜瀬筑登之親雲上　手水しよて世々に名を残す人の　いきやしがな行衛尋ぶしやの
436 天川の池に遊ぶ鴛鴦の　思ひ羽の契り与所やしらぬ
437 いつも世々に名のくたぬ恋ぢしやる人の　よしや仲嶋のうらにのこて
438 聞ば淋しさや仲嶋の浦の　友呼ひ泣ゆる夜半の千鳥
439 波の夜ひるも哀り鳴渡る　浮世仲嶋の浦の千鳥
440 難面や千鳥仲嶋の浦に　誰よ恨とて一人鳴ゆが
441 瑞慶覧親雲上　波に音そへてたる呼ひなきゆが　哀仲嶋の浦の千鳥
442 恋のしがらみか仲嶋の小橋　波のよるひるも渡りぐれしや
443 仲嶋の小橋波や立ねども　あわぬ戻る夜や我袖のらち

444 名に立る小橋渡て見きやさ
445 ふみ迷て行ゆる恋の小橋
446 遊で面白さ那覇の湊
447 歌の面白や那覇の湊
448 松と槐ともたいさかい
449 月の住吉や秋の今宵
450 押風もすだしや
雲霧も晴て月や住吉の　浮世名に立る秋の今宵
451 心住吉や秋の今宵
452 名やいつもこたん松にのこて
453 昔手にくだる無蔵が情

454 今日や名に立る十五夜だいもの
455 今日や御座出て遊ぶ嬉しや
456 詠みらんと思て出て行ゆん
457 袖に匂うつち詠み遊ば
458 でかやう押列て詠み遊ば
459 袖に匂うつち戻る嬉しや

460 月も照り清さ花も匂しゆらしや　でかやう押列て詠み遊ば
461 押風も今日や心あてさらめ　雲晴て照す月の清さ
462 名にたちゆる今日や月影も清さ　思里よさそて詠みぼしやの
463 でかやう思童波の上にのぼて　さやか照る御月ながみ遊ば
464 照る月も清らさ押風もすだしや　押列て互に遊びぼしやの
465 押風もたゝぬ波の声もないらぬ　心晴々と遊ぶ嬉しや
466 押風もすだしやでかやう押列て　さやかてる月の影に遊ば
467 月もてり清さ花も匂しよらしや　押風もすだしや出て遊ば
468 沈や伽羅とぼす御座敷に出て　躍る我が袖や匂のしよらしや
469 打ならそ竹のふし〳〵もそろて　はたち宮童の遊び美らさ
470 花の風廻や風列てめぐる　我身や友列て遊ぶ嬉しや
471 日もくれて行いでかやう立戻ら　明日も押列て出てあそば
472 菊見しき戻る我宿の土産に　あたら花やても一枝をたる
473 今日や御行逢をがで色々の遊び　明日や俤のたつよとめば
474 思ことのあても与所に語られめ　でかや（う）押列て遊で忘ら
475 蘭の匂立る花の御座敷や　ならす四つ竹の音もたかさ
476 心うちやがゆる春の野に出て　風に袖とばき遊ぶしやの

477 謝

478 栢堂長老　嬉しさや里が座羽箒たばうち　胸にちりつかばゝらてすてら

479 与那原親方　御言葉の花の匂に〔は〕身に染て　願てをて拝ま八十までも

480 孟氏宇良親方　奥に山桜節よおくれとて　御詞の花どはつに拝む

481 深山そこおれておづもたる我身の　ありがたや美御機今日ど拝む

482 諏訪李右衛門於浦添衣服下貸付

482 旅のうす衣や肌さむさあたん（す）　うらそへて賜ちぬくゝなたさ

483 かにゑる御座敷に御側よて拝で　我胴やれば我胴ゑつでど見やべる

484 尚育王　厚き御恵や報る方ないらん　朝夕さん千世の御願しやべら

484 ならす四つ竹の音にまぎりてど　おやぐみさあても御側よたる

485 別離

485 糸柳いきて我がいしやくしゆもの　旅の行き戻り糸の上から

486 見詰めてやをらぬ旅の空だいもの　御胴しき御胴頼でたぼうれ

487 見詰めてやをらぬ旅の習いだいもの　いきも又言もものめつめれ

488 思がごとなゆる浮世やたらませい　旅のいく先もつれて行い

489 頭らよいかわち赤糸帯しめて　我身つれて御旅いまゐち〔衍入〕やならね

490 いまいちかば里前御状もたちたぼうれ　心安々と御まちしやべら

491 里や明日出船のゝみやげしやびが　嘉例吉の歌どみやげしやびる
492 蒲添王子　錦打重ね嬉しごと菊の　花の咲く比にまたも拝む
493 暇乞もしよらばかねてからめしやうれ　明日出船なればものもいやらぬ
494 美懐あけてわんかくち賜れ　御船登て里が御住所をがま
495 縄取る御船のよしぢよしまれめ　いまうきまうれ里前朝夕をがま
496 よしぢよしまらん旅の空やれば　かなし振別もすらなゝよめ
497 三重城に登て手巾もちやげれば　早船の習や一目ど見ゆる
498 三重城に登て打招く扇子　またも廻り来て結ぶ御縁
499 里が御船送て戻る路すがら　ふらぬ夏雨の我袖ぬらち
500 徳元里之子　暫時啼鳥も心あて呉な　三年別路の今宵やれば（すが）
501 別れ路や詰めて近くなてくれば　片時も御側はなれぐれしや
502 泪より外に（い）言葉やないさめ　詰て別れ路の近くなれば
503 別よる袖に匂うつち賜れ　俤の立ば伽にしやびら
504 別れよる袖に匂うつち賜れ　匂のある間や御側ともら
505 別て俤の立ば伽めしや（う）り　なれし（匂）袖にうつちあもの
506 別るさめとめば袖に浪立て　また拝む間やいきやがしやびら
507 遊び染馴ていきやし別やびが　哀れこの宿に思残ち
508 小橋川筑登之　のゝよしもないらぬ野辺のかり宿に（の）　別るさやきやがな名残り立さ

509 哀り里よしむ言の葉もたへて　かきくもて雨の降なやすが
510 語らよる内にいことばや残ち　よしまらぬ鳥の別れしらち
511 暫し手枕に鳥も啼すみて　かなしさやありが思ゑ残ち
512 又いつか吸らしらん手枕に　恨しやいそぐ鳥の初声
513 邂逅の今宵鳥やうたらわん　しばし明雲の情あらな
514 自由なよて我身の引よとめおかな　立別る里が御衣の御袖
（我自由になよて　あれ）
515 御側をてだいんす思やまさやびす　別て我身一人ならはきやすが
516 宜野湾按司　かに苦しやあるゑ侭ならぬ我身の　別らてや（り）すれば袖や引ひ
517 惜む夜や更て明雲も立ゑ　にやまた　いつをがで百気のぴゆさ
よしまらん別るさらめ
518 さらば立別ら与所目ないん内に　やがて暁の鳥も啼ら
519 暁やなたいゝき（や）おそうずみ（し）やいが　別るさめとめば袖のなみだ
520 にや又いつ拝で語る夜やしらぬ　別ていく路の露のしげさ
521 高嶺按司　別り路の露にぬれる身が袖や　たがしぼてほしゆがてだやないらぬ
522 振棄ていつめこぶがすの糸に　かゝる蟬よりも鳴んしよもの
523 互に馴染て秋の終夜　語らても残る鳥やなきやさ
524 鳥うたてだいんすかに苦しやあもの　又も開門がねのならはきやすが
525 あかぬ別よる袖の白玉や　無蔵（が）たみやてど包でいきゆる

526 別りても互に御縁あてからや　糸にぬく花のちりてのちゆめ
527 時の間の紬〔袖〕合深く染なきよて　別り路の袖に波ど立る
528 契る夜互に明る間やしらん　語らても残る鳥や啼さ
529 立戻らにやまた暁やなたい　やがて開門鐘（の）ならんしよもの
530 月の影だいんす袖に宿かよゑ　暫し待みしやうれ語らいぼしやの
531 高良親雲上　よしまれんと思めば袖取ゐ泣も　きやしよが假ならぬ浮世だいもの
532 照雲やしめて鳥やちやうん啼ん　待みしやうれよすが互に語ら
533 鳥やうたらわん夜や明て呉な　まれの手枕の語らいだいもの
534 哀れ暁の別るつれなさや　月に袖ぬらち戻て行さ
535 秋の夜百夜語らてもあれと　（い）言葉や残て鳥や啼さ
536 仲程親雲上　別りよる御袖打あける風の　見ず見らずなればよくの涙
537 明暮の事や兼てしりながら　のよでうらみよが今朝の別り
538 里拝む夜や宵とめば明る　語らい尽さらん夢の浮世
539 安慶田　限りきて我身や先なやいをらば　いづれ緩々と遊でいまうれ
540 豊見城親雲上　さらばこれ迄か親と子の中も　別て草枕露にぬれて
541 義理ともて互に思切いをすが　誠これ迄での別りとめば
542 生別だいんすかにくれしやあるゐ　若しか嵐（声）のあらはきやしよが
543 人の思きりやあづさ弓心　さらばこれ迄での別れしらね

544 いつし忘よが身にあまる情け　袖にのちとめて別れぐれしや
545 鳥うたひば里前のが急ぎめしやうる　限りある鐘のならぬおきよめ
546 喜屋武按司　別れ路の空につれていくものや　袖にちりうてる涙ばかり
547 前田　またいつかてやり契る（い）言葉も　たへて我袖に露どうちゆる
548 座喜味里之子親雲上　うつくれや頭らさみだりの伊に　繁く露濡ち別れぐれしや
549 思てのちをらばまた拝むさらめ　命の定りど互にしらん
550 文氏江例〔洲〕親雲上　のが急ぎみしやうる月もてりぎよらさ　暁よともて鳥や鳴きゆら
551 与那原親方　おきり火に居してやくよりもまさて　かなし振別の百のくれしや
552 仕情どたのむ人のならいやすが　袖とやゐ引も捨ていまいさめ
553 あひたなま爪ややでどあかれよる　やまなあかれよさあれと我身や
554 御衣の袖とやい我がよしみなげな　きやならわんともて捨てゝいまひみ
555 別れたんてやり肝の別れよめ　縁や通きゆて節ど待ゆる
556 しゆらし匂袖に移す玉金　俤のたゝは伽にすらに
557 袖に匂うつき情身に染て　思重ねてど伽にしやべら
558 別れがたなさや互にあらやすが　難面のあまり一人ともて
559 別れても互に心有明の　月と日の廻り節ど待ゆる
560 俤とつれていきやし別やぴが　語てもあかぬなれし御側

561 廻てまた拝む御縁あらやすが　別れよる袖や露のしげさ
562 さらばこれまでの別れ路やしらぬ　一期てやりともて侭にしきやす
563 里や浮舟に我やそのいかひ　縁のつれなさや別れぐれしや
564 この難面さみやがな捨ていかれよめ　たとへ朝顔の花といきも
565 あかぬ手枕に鳥や鳴渡る　のよでこの世界に義理のあよが
566 暁の鳥声我ないたがてをたす　またぬ開門鐘の別れしらき
567 かな〳〵と互にかたらゆるうちに　情ないん鳥の別れつげて
568 打殺す鳥もたゝきわれ鐘も　暁の別れしらすとがに

569 小橋川筑登之　あにいるあかぢやなにものなげてくいるな　暁の別れしらす　とがにやから

570 初途の御側拝む手枕に　うらめしやつめる四方の鳥声
571 一期暁や衣々の別れ　語らひつくさらぬ恋のならいや
572 明日からやあさて里が番のぼり　滝ならす雨のふらなやすが
573 夏の夜のならいや語らい尽さらぬ　思ひいくと葉ものこるらみしや
574 暁の別れ袖に波立て　仲島の小矼渡りぐれしや
575 棄ていかれらぬかなしさやあれが　立別る袖にすがて鳴ば
576 義理だいものきやしゆが思切なゝよめ　俤や里前のくちいまうれ
577 義理やくれ（し）もの一人ましこまて　かなしいこと葉も語ひ残ち

578 糸柳いきていしやくしち別て　嬉し菊いきて又ん結ば

羇旅

579 馬氏浜元里之子親雲上　月日かさなれば歳のよることも　知なげな急ぐ旅の空や

580 便り押風のものいゆものやれば　日々に音信や聞ゆらやすが

581 我が思る方に吹送る風の　ものいふものやとていやゐすらな

582 鳴渡る鴈に文やちやうん持ち　振別の難面さいやゐすらな

583 鳥やちやうん飛ん渡海やひざめとて　夢のほれものや御側ともて

584 思ひ有明の夜半の難面さや　馴ぬ与所嶋にをてどしゆる

585 与那原親方　旅宿のねざめ枕側立て　思出さ昔夜半のつらさ

586 同　かにも難面さめ旅の上の空や　詠ゆる月も伽やならん

587 渡海やひざめとて夢のほれものや　かなし子よ前なきねなんともて

588 哀れ山寺の鳥声諸共に　鳴どあかしよる旅の空や

589 翁氏伊舎堂親方　渡海ひざめ無蔵も今日や詠めよら　見れば思増る十五夜御月

590 伽なよらともて詠れば月の　物ど思わしよる旅の空や

591 旅の空やても月やひざみらん　月に音信よいやゐすらな

592 古波蔵親方鄭嘉訓　難面さや松の隔てらんあれば　故郷のましがきも見よらやすが

593 喜屋武按司　かにも不楽さめ旅宿の習や　松に吹く風の音声ばかり

594 喜屋武親方　馴し俤や旅の上につれて　朝夕気の毒に成が心気（おしよもはなれちん我胸くがき）
595 同　なれし思（無）蔵が歌てやりおぞで　聞けば屋久島の鳥の初声
596 豊見城親雲上　忘れよらともて月よ詠めれば　物ど思わしよる旅の空や
597 祝嶺　いづれ嘉例吉に浮名先いもうち　嬉しや我が宿に語て賜れ
598 尚寧王御姫〔妃〕　北風のまきた吹つめれ〔て〕をれば　按司（お）そへてだの御船どまきよる
599 最早押風も嬉しごと菊の　花に音信の匂ゑ立さ
600 行衛しらなしよて行兼らとめば　哀れかさなよさ（よくまさる）旅の空や（つちさ）
601 なれぬ与所嶋やかにもつれなさめ　頼て語らよる人もをらぬ
602 すんねくり舟の行ゆる渡海やれば　今日や行拝で明日やきよすが
603 旅宿の哀しらさなやあれに　夜々に通はしゆる夢路たよで〔て〕
604 仲程親雲上　旅のうちつらさ忘らてやりしきど　頼で詠たる月も花も
605 渡海やひざみても照る月やひとつ　あれも詠よら今夜の空や
606 馴し俤や旅までもつれて　夜々に手枕の夢のつらさ
607 暮さらぬくらし旅の上の空や　朝夕難面のはてもないらぬ
608 旅宿のねざめ明さらぬあてど　難面さや一人鳥声待る
609 さゞ波の音に住馴し嶋の　俤ど増る朝も夕（さ）も
610 浜に打寄るさゞ波の音に　すみなれし島の思ひまさて
611 哀れ磯ばたやかにもさびしさめ　朝夕さゞ波の音声ばかり

感慨

612 尚寧王御母　照る日にだいんすてらさごとしよすが　与所島のならいや廉相にあにた
〔麁相にあたら〕

613 尚寧王　よかてさめ兄弟や親加那志御側　我身や与所島のあらの一粒

614 よしや　生居たる間や麁相にしき朝夕　しねばかんじや門に通てのしゆが

615 平敷屋親雲上　夢が又やよら地の底がやよら　さとらゝぬ昔月のあがて

616 世界やふりものゐあかい屏風たてゝ　花やおしかくき匂やきやしよが

617 我が御主がやよら親ほじがやよら　さとらゝんむかし百恨みしやの

618 石嶺親雲上　酒もあがよらばこの世をてあがれ　祭したゞれのあの世いきゆめ

619 よしや　あんま主やよかて生れ島いまいひ　我身や仲島のあらの一粒

620 恩叔和尚　この世人間やいつもかにさらめ　残る人ないらぬ市の夕暮

621 仲吉親方　花に山嵐月の夜にかすみ　かゝるつれなさど浮世さらめ

622 蔡氏福地親雲上　ひら松のかげに忍ぶあとかくき　いきゆれども与所のしゆらとめば

623 尚灝王　いきたらぬことや一人ひ身にみしやうち　百艸の哀れ救てたばうれ

624 翁長親方　年や寄詰て幾度詠ゆが　名残たちまさる秋の今宵

625 紺染の袖のいなくきゆんとめば　百八の玉やのかんたすが

626 素立らぬ親のゝよで我身生(なちゆて)が　花に押出ち与所にもまち(す)

627 雲や日かくす風や花きらす　おもわごとならぬ世界の習や

書懐

628 伊野波親方　我ほらさのうてや山畠しよんで　夏ならば見やうれ粟穂からは
629 名護親方程順則　ほめられもすかぬそしられもすかぬ　浮世なき〳〵と〔なだやすく〕渡りぼしやの
630 具志頭親方蔡温　ほめと〔ほまり〕そしらりや世の中のならい　沙汰もないんものゝのやく立が
631 新城親方　らくぶつの御帯よわら押引まうき　首里加那志美公事でわないさだら
632 名護親方程順則　山路ふみわけて道しらば我身の　たとへなま死ものうらみゆが
633 深山こぶだいんす経かけておちゆひ　我をいなごなとて油断しやびみ
634 むぢやりかな分ち布になすばかり　花もやすらみも織どしやびる
635 安慶田里之子親雲上　自由なよて月日おもかい打はけて　若さ大道につなぎおかな
636 同　竹馬の昔くりもどし〳〵　わかさ大道に一期のらな
637 久米知念筑登之親雲上大和人ト喧嘩ニ付御糾明之時
638 たとへ身がゝばねさらすとものよで　胸内の鏡くらくなしゆが
639 よる年の戻ち若くなられよめ　たゞ遊びみしやうれ夢の浮世
640 平敷屋親雲上　莆の葉どやすがもてなしのよたしや　暑さすだましゆる玉の団扇
641 つく〳〵と一人心たづねれば　自由にわたられる世界やあらぬ
642 宜野湾王子　かすかけて渡る深山こぶこゝろ　一期世の世話のはてやないらぬ
豊見城王子、大上様御用ノ時よみて奉る
閻の山原や道しらぬあもの　月てらきたばうれ仰ぎをがま

643 大宜味親方　このちやなて見でば童なゐかわて　のたる竹馬ものらぬばかり
644　浮世ならわしと兎に角にしきも　一期苦みのさねどまきゆる
645 尚灝王　六つや六つともて暁よともな　おぞでさとらゝぬ夏のあられ
646 同　山のさらかきに袖やひかるとも　匂ひある花やたづねぼしやの
647　いこと葉の匂どこの世界のかたみ　きりてよしまらぬ露の命
648　たるが先なゆら定まらぬ命　一期言語ひど遣言さらめ
649　十日とめば廿日のくる日も多さ　先も定まらぬ人の浮世
650　長さすやあまていんきやさやたらん　中墨の一手肝の寸法
651 石嶺親雲上　よだり玉散ち飲間の浮世　さめて慾悪のつかはきやしゆが
652 義村王子　肝の楫しきゆて渡る身が舟や　情けおそ風ど一期たのむ
653 宜野湾按司　情けゆへ外にたのむしやないさめ　つくゝと浮世忍で見では
654 同　仕情どたのむたるが上になても　忘れたいひいきも思なおきよめ

655　応題

人にあることのかくさらぬあすや　閻の夜の梅の匂さらめ

656－1　分句

政章　草葉おろわしよる雨露のめぐみ

656−2 朝昇　十日越にふゆる御代の嬉しや

冠首

657 与那原親方　はる〳〵と拝でなつかしや袖に　秋の夜の露のふゆるしげしや

658 春や花盛り夏かしやあれが　秋はてゝ無蔵が冬らとめば

659 読谷山王子きよらがさの歌と云ふ八文字ヲ冠首にして

660 聞けばきくごとにたが宿も軽く　誠清ら瘡や今年さらめ

661 四方の民までも今年清ら瘡や　軽くやす〳〵と出る嬉しや

662 蘭の匂立て御座に伽羅たけば　ほこて清瘡の神やいまゐさ

663 上や下までも今年清瘡や　願たごと三粒出る嬉しや

664 里々にはやる歌までも今や　軽く清ら瘡の御願ことば

665 のどかなる御代にはやる清瘡や　上下も軽く出る嬉しや

666 歌や三味線に躍羽しきよて　清ら瘡の御伽遊ぶ嬉しや

667 只三粒たばうれ今年清ら瘡や　上下も仰ぐ神の恵み

疱瘡歌

668 世々の世々とゝめ大和からこまに　軽く清ら瘡の時行る嬉しや

669 御守よめしやうれかろみ森うずぢ　御名のごと軽く三粒たばうれ

今年清瘡や上下もかろく　いつもこのごとに三粒たばうれ

670 二色金蘭〔襴〕のひりといのむしろ　しかはゑらみしやうれ御疱瘡御神
671 大庫理の簾れ巻上れは童　清ら瘡の御神（ほこてぃまぃさ）ほこていまいさ
672 九重の内に沈や伽羅とぼち　清ら瘡の御神いまいんしやうちやさ
673 虚空蔵大菩薩清ら瘡の御神　御願しよるごとに三粒たばうれ
674 大庫理もかばしや小座敷も香しや　讃良三助の御宿みし（や）いさ
675 清ら瘡の御神躍すきでもの　躍て御伽すば軽くたばうさ
676 童あてなしの御願しきをもの　御見守てたばうれ御疱瘡御神
677 首里天加那志御子部も軽く　只三粒たばうれ御疱瘡御神
678 四海浪たゝぬ御代の春風に　時行る清ら瘡やたるもひとつ
679 恵みある御代に時行る清瘡や　御万人も軽く出る嬉しや
680 御代の春風にはやる清瘡や　いつよりも軽く出る嬉しや
681 治とる御代にはやる清ら瘡や　かわる色ひとつあまもこまも
682 嬉しごと菊の花咲るころに　軽く清ら瘡のはやる嬉しや
683 与那原親方　御代からどやよる国の端までも　かわる色ないらん清さあすや
684 美代からどやよる（がら）今年清瘡や　水かみてきんみ引がきよらさ
685 ほこゐ声ど聞ゆる上も下も
かん軽さ清さ上も下も
神の代の人のいはやしのごとに　だんぢよ　清ら瘡や玉の金ね
まこと

686 やもてから引る日数定まとす　誠清ら瘡のしるしさらめ

687 時行る清ら瘡のかに軽さあすや　恵みある御代のしるしさらめ
君が代のさかるしるしさらめ
恵みある御主の御代のしるし

旅歌

688 だんじよかれよしや撰でさしめしいる　御船の縄取ば風やまとも

689 玉城王子　首里天加那志もゝとわれちやうわれ　旅の行戻り拝ですでら

690 高嶺按司　いきの帆のほなかほゑつゝむ美風　聞得大君のおすぢ美風

691 いかい引乗て本帆矢帆もたち　いまゑのかげうたいは風やまとも

692 与那原親方　御祝日になれば押風も　やまとも　だんじよかれよしのしるしさらめ

693 渡中押出れば船頭まゝでもの　真艫のてたばうれ御船の船頭

694 かれよしの御船の渡中押出れば　波や　おしそへて　はるが美しさ
も　風やまとも

695 去年よりも今年旅の道ひろで　船はらち見れば波も静か

696 糸数里之子　那覇の親泊押立るはしら　唐土親泊ひちよゝ〔ママ〕はしら

697 おもて花さかちともに　すぢ
のぢ　ひかち　旅の行戻り糸の上から

698 699 700 701 702 703 704 705 706 707 708 709 710 711 712 713

平敷親雲上　那覇からや出ちまどろみどしよたる　いつの間につちやが山川湊

先みれば唐土後見れば浮縄　これ程の美風今度はじめ

大和から浮縄糸のかけられめ　まとも押風どにや糸さらめ

あがと渡海ひざめ糸のかけられめ　真艫押風どにや糸さらめ

船はらきだいんすかに嬉しやあもの　島をがでからやよくの嬉しや

かれよしの御船にかれよしは乗て　唐土行戻り糸の上から

うよそから見ればあひな渡海やすが　御船はらちみれば近地だいもの

山川の湊すぐにのいめしや（う）ち　嬉しかをつきの拝むごとさ

すだし親加那志どくおさうずめしやうな　按司下司もめしやいる御旅だいもの

御旅しん美さみやだりしん美さ　いきやる親加那志すだしめしやうちやら

寅の日に出ち寅のはいしめて　いつの間につきやが虎の門口

とらのはの風に虎の日に出ち　寅のはいしめて虎の門口　門ヤ日　木ノ下迄

あたひ苧の中子真白引さるき　旅にまいる里がどんしよばかま

おほくらしや里前御状もたち賜ち　心安々と御待しやびら

主の前御状をがで読開くときや　我胴やれば我躰ゐつでどみやびる

里が庭花やものんいやんばかり　唐土打向て笑てさきよさ

714 慰みにとたる　礫子やあらぬ
玉のいしなごや　里がいまい月のさんどとたる

715 明て九十月や肝いそぎめしやうき　嬉しかを御側拝みぼしやの

716 かれよしの遊び打はれてからや　夜の明て日のあがるまでも

717 夜の明て日やあがらわんよたしや　巳午時迄でや我手間さらめ（御祝しやびら）

718 尚育王　虎に羽つけて飛よりも早く　雲に走入いる按司の御船

719 月や月ともて明る夜もしらぬ　かれよしの遊びにやうちほれて

720 唐土から出き今日三日どなよる　いつの間につきやが那覇の湊

721 慶良間はいならで石火矢どゞめかき　引船やあとに那覇の湊

722 いないまいんでいきや夢やちやうん見だん　御願引合にいないまうちやさ

723 三年重いよす待ながさあすが　願て自由ならん北京御旅

724 百気いきのべる里や旅しめて　朝夕肝の願算やしらぬ

725 里がいまい月の近くなてさらめ　夢も俤もしげくなとす（さ）

719 月や月ともて明る夜もしらぬ　かれよしの遊びにやうちほれて

720 唐土から出き今日三日どなよる　いつの間につきやが那覇の湊

721 慶良間はいならで石火矢どゞめかき　引船やあとに那覇の湊

722 いないまいんでいきや夢やちやうん見だん　御願引合にいないまうちやさ

723 三年重いよす待ながさあすが　願て自由ならん北京御旅

724 百気いきのべる里や旅しめて　朝夕肝の願算やしらぬ

725 里がいまい月の近くなてさらめ　夢も俤もしげくなとす(さ)